

# 戦争と少年

武田 剛こう

(会員 佐伯市木立目筈)

去年の八月六日、木立小学校の平和授業で「戦争中の想い出を話してほしい」と言われ、「五百戸の木立から三百二十人が戦争に行き、百五人が戦死した。戦争に行く人を見送り、戦死した人の遺骨を迎えるのがつらかった」と話したら、みんな身を乗り出す様に聞いてくれた。私に質問するのに手をあげた少年は、涙に咽なんで言葉にならなかった。児童達にとつては初めて聞く話で、シヨックが大きかったのである。

以前、文化会館大ホールの成人式での挨拶で、「太平洋戦争による佐伯市の戦死者は千二百九十九人で、このホールの座席数千三百八とほぼ同じであります。」と話したら、みんな真剣な表情で会場を見まわしていた。

この様な小学生や成人者を思うと、私達はもつと戦争の実態と、戦争時の体験を次の世代に語り伝えなければならぬと考えた。私の少年の日の体験といえども、佐

伯の歴史の貴重な一部分なのだと思う。

私が小学校三年の時に日中戦争が始まり、六年の時、日米戦争に突入し、中学四年の時、戦争に敗まれた。その想い出を書こうとすると、書きたい事が余りにも多いのに驚く。

昭和九年私が五才の時、父は私を「佐伯海軍航空隊開隊式」に連れて行ってくれた。「佐伯市史」をひもといて見ると、当時の佐伯、南郡の町村は、航空隊誘致に全力をあげたという。それが成功して開隊式になったのだ。飛行場は今、興人の佐伯工場になっている広場で、大勢の見物客でごった返す中に、父はムシロの広さ位の帆木綿はもめんを敷いて私を座らせ、膝の上にバナナの大房をのせてくれた。それで満腹にして振り仰ぐ空には、今まで聞いた事もないごう音を立てて複葉の飛行機が舞い上がり舞い降りた。それはまさに秋風に舞うトンボの様だった。私は父のおかげで佐伯海軍航空隊の誕生日に立ち会う事が出来た。

航空隊が出来た当初、しばらくは足に長いフロートをつけた水上飛行機が多かった。今の佐伯重工の造船所の

所が水上飛行機の基地で、盛んに水しぶきをあげて離着水していた。石間の漁師さんが舟を漕いでいると、着水しようとする飛行機のフロートで頭を「ガン!!」とやられて亡くなったという。後年亡くなった人の息子さんと知り合って詳しく聞いたが、「海軍は一銭の補償もしなかった」と言う。ある年、葛港から四発の飛行艇を見てびっくりした。まだ双発の飛行機も見た事が無かったから。その後、水上飛行機よりも陸上飛行機が増えていき、毎年の様に馬力の強い新型機がやって来た。複葉が単葉に変わり翼が胴体の下につく様になって、ゼロ戦・艦爆・艦攻がごう音をとどろかせて飛んだ。そして毎日の様に、艦爆・艦攻が白坪のはるか上空から、航空隊目がけて逆落しに急降下爆撃をする訓練には、いつもそのまま突っ込むのではないかとほらはらした。白坪の山がハワイの山に似ているので訓練したそうだ。佐伯で訓練したパイロットはその儘ハワイ攻撃に参加したという。

軍港になった佐伯湾も軍艦でにぎやかだった。昭和十一年に父が有明小学校、今の鶴見町日野浦の教員になったので、私は夏・冬の休みには単身赴任の父と学校の宿直

室で暮らした。有明は人情の厚い海の美しい所で、私の心の故郷である。前の海、佐伯湾にはいつも軍艦が浮かんでいた。私は戦艦から駆逐艦まで、ほとんどその姿と名前を覚えた。

戦艦、陸奥・長門・伊勢・日向等の巨艦は、まるで四角な鉄の箱をこれでもかこれでもかと思う程積み重ね、まるで大阪城や熊本城の天守閣の様だった。航空母艦のかがは鉄の島が浮かんでいる様で、積んだ飛行機に煙が掛からない様に煙突が下向きに出ていた。

今でもタバコの煙を鼻から下に吹き下ろす人を見ると、加賀を想い出す。

姿の美しい重巡の鳥海・摩耶・妙高・羽黒、何か哀愁を感じた軽巡の夕張・阿武隈、有明から眺めた夕焼けに浮かぶ夕張の艦影はまぶたに焼きついている。駆逐艦は横腹に白い大きなカタカナで艦名が書かれていた。

「シラクモ」という当時子供の頭の皮フ病と同じ名前  
の駆逐艦がいて、「あの艦は可哀そうじゃあ」と思った。

小学校四年の時、戦艦伊勢の見学に行った。直径三十六寸の砲弾を撃ち出す長大な大砲を、恐るおそる撫でて見た。深い艦底に降りて巨大なエンジンに肝をつぶし油

にまみれた機関兵の光った眼におびえ、海軍精神注入棒  
といって消防ホースの筒口が平たくつぶれているのは、  
水兵の尻をぶつ叩くからだと聞いて鳥肌が立った。

木立の須留木から「軍艦見」によく灘山に駆け登つた。そこからは佐伯湾が一目に見渡せた。昭和十六年の初冬、湾内は軍艦で一杯だった。この艦隊がハワイを攻撃したとあとで知った。

中学三年の時、「生徒も国の為働け」という学徒動員で、今も坂の浦にある本田造船所で二百五十トンの木造船を造った。船の大きさは大入島フェリーの倍位だった。そんな大きい船を大人の班長一人と、生徒三十人程で造りあげたのだ。まさに血と汗の結晶だった。この船はスマトラ島から石油を運ぶという。

とても無事には帰れまいと思った。この時の班長、青木幸生さんはお元気で、海崎駅前区に住んでおられる。今の中学生に「二百五十トンの木造船を造れ」と言ったらどんな顔をするだろうか。

その頃、満州の鉄道で働いていた兄信治郎が軍隊に入営のため帰郷し、三日程いて出発した。霜の深い朝、兵

隊見送り“の行列の先頭で兄は、故郷を離るる歌”を小  
声で歌った。

「園の小百合撫子垣根の千草、今日は汝を眺むる終りの日なり：さらば故郷：故郷さらば」：母と姉の顔が涙で濡れていた。

兄はサイパンで戦死。今でもこの歌を聴くとつらい。小さな村にその頃から白木の箱の遺骨が次々に帰って来た。親や妻や子に抱かれて、木立の長い野の道をとぼとぼ歩く迎えの長い哀しい行列、出迎えた老母の嘆く姿。兄の遺骨も父が抱いて帰って来たが、箱の中は薄い紙にただ名前が書いてあるだけだった。母の悲しみと怒り。

やがてB29の空襲が始まり、大分や延岡も焼けてしま  
い、佐伯にも爆弾が落ち、中学校の本館がたった一発で半分ふつ飛んだ。電報電話局前の防空壕も直撃され、三十三人が一ぺんに死んだ。跡片付けに加勢したが、現場の有様は今のミサイルやテロによる爆発のニュースそっくりだった。馬場の松に引つ掛かった衣類や肉片、火薬や血のにおい。戦争はただ残酷たらしいだけだ。

B29に続いて「グラマン」がやって来た。

スマートなゼロ戦などと違い、ずんぐり丸く、いかにも憎たらしいスタイルだった。そいつがまるで熊蜂の巣をつついた様に、何十機もやって来ては航空隊と防備隊を、これでもかこれでもかという様に攻撃する。造船所の上の坂の浦山のとっぺんにあった対空監視哨、といっても松の枝に板を渡しただけのものだったが、そこからは実によく見えた。グラマンの腹から光の尾を引いて飛び出すロケット弾の威力には目を見張った。今の文理大付属高校や、野岡一带にあった防備隊が見ている間に吹っ飛び焼けてしまった。

その頃、飛燕ひえんという陸軍機が、十機ばかり佐伯航空隊に来ていた。それが迎撃に飛び立ち給油に帰って着陸したのを、まるで見すましたかの様にグラマンが襲い掛かり、新品の飛燕が「あっ!!あっ!!」と言う間に撃ち碎かれるのをこの目で見た。がっかりしてくやくしくて泣いた。飛燕は水冷エンジンでつばめの様にスマートで、スピードも速かった。B 29をやっつけると期待していたのに。

しかし、ただやられるばかりではなかった。航空隊周辺の対空射撃も猛烈で、やられたグラマンが大入島石間

のトウドウ鼻のすぐ先に、大きな水しぶきをあげて墜落するのを見た。現在、廃棄物埋立てで反対運動の起きている所である。

その頃、一人の水死体が造船所の浜に流れ着いた。死体はパンパンに膨れ上がって、波打ち際で揺れていた。「軍艦に飲料水を運ぶ水船の水兵だという。すぐ海軍の舟艇が来て引き揚げたが、「ああ、これが海ゆかばの水浸かばく屍か」と思った。収容もされず、海や野に朽ちた兵士の数はどの位だろうか。

ある朝、同級生の谷川嗣郎さんと自転車で蛇崎の県道を造船所に急いでいると、突然背後に爆音、「ギョッ!!」として振り返ると茶屋ヶ鼻の上空から、怪鳥の様に翼を広げたグラマン、とっさに自転車ごと道端の田圃に突っ込んだ。とその道に「ダッ!!ダッ!!」と機銃掃射、舞い上がる土煙りと爆風、危機一髪だった。機銃といっても機関砲であるう、はじき飛ばされる様な爆風だった。今ここには大きなパチンコ屋が出来ている。谷川さんは、一昨年亡くなられた。蛇崎の井東勝己先生方の後にあつた小山にも、高射砲が座わっていてよく撃っていたが、いつも飛行機の通った後で弾が破裂していた。

一度敵機の爆撃を下から見た事がある。胴体の下が大  
きく開いて黒い爆弾が数十個「ドサツ!!」と落ちるのが  
見え、それがすぐ見えなくなつたかと思うと、飛行場に  
黒煙が湧き上がり、続いて腹に響く爆発音が聞こえた。  
やがて沖繩の玉砕が伝えられたが、沖繩から疎開して  
佐伯中学に編入されていた六名の級友には慰める言葉も  
無かつた。

その頃上陸して来る米軍に備えて、中学校でも竹ヤリ  
隊が編成された。三丁位の竹の先をヤリの様にそいで握  
りしめた。刀のある者は腰に差した。竹ヤリが役に立つ  
とは思わなかつたが、ただ米兵から「母や女学生を守る  
のだ」という気持ちでまなじりを決した。

広島・長崎に新型爆弾が落ち、それが原爆という事  
や、甚大な被害も知らされていない八月十五日、目もく  
らむ様な炎天下造船所の庭で、「ガアガア」鳴る雑音ば  
かりのラジオの重大放送を聞いた。はじめは「女の人が  
泣いているのかな」と思つたら、それが天皇の声だつ  
た。天皇は神様と教えられていたので、声を聞くのは初  
めてだった。「耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍び」  
と言うのは聞き取れたが、これだけで「戦争に敗けたん

だな」という事はわかつた。日本のギブアップの声だつ  
た。

戦争に敗けた明くる日、物凄い数の米軍機を見た。独  
歩の登つた木立の元越山に連なる鶴見半島から、蒲江に  
かけての山々から、二十機・三十機編隊の飛行機が来る  
わ来るわ、ざつと七百機までは数えたがまだ来た。恐ら  
く千機を超えていたのではなからうか。一ぺんに千機も  
の敵機を見ると、敗戦の悲しみどころか、ただ呆然とし  
てしまつて、「こりや敗けるんが当たり前じゃあ」とあ  
きらめが早かつた。

敗けたので造船所から中学校に帰り、校舎を修理した  
り、航空隊にやられた飛行機のエンジンを貰いにガラガ  
ラ車力を引いて行つたりした。滑走路にはあの飛燕の残  
骸が散乱していた。私は、佐伯海軍航空隊の末路を呆然  
と眺めた。誕生してから死ぬまでを見たが、長い様でわ  
ずか十一年のはかない命だった。

佐伯湾には一隻の軍艦も無かつた。岸边には所どころ  
小さな特殊潜行艇が繋がれているだけだった。あの佐伯  
湾を埋め尽くした連合艦隊を見た時、戦争に敗けるなど

思いもしなかったが、その艦隊がほとんど沈んだのだ。  
壇ノ浦の平家の負け戦の様に。

記録を見ると、連合艦隊六三七隻のうち四七〇隻が沈没し、残り一六八隻のうち、どうやら航行出来たのは小型空母一、輕巡三、駆逐艦二八、潜水艦九であったという。

見学に乗艦した戦艦伊勢は、呉港で燃料が無くて出撃出来ず、グラマンの餌食になってスクラップ同然になったという。姿の美しかった巡洋艦夕張はパラオで撃沈され、駆逐艦シラクモは北海道釧路沖で敵潜にやられて沈んだ。沈んだ四七〇隻の艦内に閉じ込められたまま、脱出出来ずもがき苦しんで死んだ水兵の事を思うと、「つまらん戦争をやったもんだ」という怒りが湧いた。

少年の日々、魅せられた飛行機も軍艦も、先を争って受験した予科練の七ツボタンも、すべてが空しかった。

つづくく考えて見ると、戦争は本当にバカらしかった。飛行機が機関銃で落し合う。空から爆弾をバラまく。原爆で皆殺しにする。鉄の船に大砲を乗せて沈め合う。鉄砲でねらって殺し合う。何百万人も殺し何百万人

も殺された。国のため、天皇のため、鬼畜米英、自由、民主々義は国賊思想だ、などとおだてられて殺し合ったのだ。それが戦争に敗けるとコロ!!と変わる。こんなバカらしい事があるのか。死んだ人をどうするのか。

もう二度とこんな事をしてはならない。  
これが少年の日の戦争の体験から得た私の結論である。

私は木立の小学生に話した。

「戦争は空しく、残酷むごたらしい。どうか戦争をさせない英智を持って欲しい。しっかりした自分の考えを持って欲しい。」と。

